昭和二十二年の秋

港南区支部　小川　君子（妻）
戦没者　小川　　茂
戦没地　マーシャル諸島

其の日、どこからか金木犀の花の香りがしてきて・・・
遠い弘明寺の山の上から真っ赤な大きな夕日が茜空の中へゆっくりと静かに沈んでいった。私は一枚の紙を握りしめ家を飛び出して橋の上に立っていた。眼から止めどなく涙が溢れ、赤い夕日は涙に滲んで消えていった。

夫の戦死の報せでした！

夫の兄が抑留されていたシベリアから九死に一生を得て帰還してきて、焼け野原になった横浜の中から、私達親子を探し当てて、持ってきてくれたものです。横浜の度々の空襲により転々と住居を変えていたため、探し当てるのは並大抵のことではなかったと思います。そして私の手に渡してくれました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

本当には出来ず、年老いた両親と子供には告げられず・・・
家を出て橋の上で見たあの赤い夕陽は、一生忘れられないものでした。
戦死地はマーシャル群島の小さな島『ルオット島』と聞きましたが、地図にも出てない位の小さな島で、どんなに苦しかったか。子供を案じて南十字星を見ていた事でしょう・・・
私は富山の富豪の家に一人娘として生まれましたが、訳有りで、生後一週間目に横浜の遠縁の家に貰われてきたそうです。子供の無い夫婦の家でしたので、大変大事に育てられ、教育も付けて貰い、幸せに育てられました。
十八歳の時、すでに支那事変が始まっていて、配給制度の世の中になり、家の商売が厳しくなってきたため、結局、何も解らない歳なのに婿を取ることになりました。人のお世話で、鎌倉に在住していた家の三男坊が、私のお婿さんに迎えられました。当時はお兄さんが出来た様なものでした。
時局は、更に悪くなり支那事変は日中戦争に拡大し、更に大東亜戦争へと大きく激動の渦へ巻き込まれていったのでした。
昭和十四年、男子を出産。七か月の早産だったので、多くの人の手を借りて、大変な苦労をして育てていただきました。当時は保温器具など無く、湯タンポで体温を調整しながら、医者とお産婆さんで力を合わせ、細い小さな命をよくぞ助けて頂きました。
一歳位になった頃から、父の後を追う様になり、朝、横浜ドックへ出勤する父を、バイバイと手を振り、途中まで見送った幸福な短い月日でした。三歳位になった頃から、戦争は益々激しく

©2011_財団法人神奈川県遺族会

なり、とうとう若い夫にも、海軍へ電気技術者の軍属として連れていかれました。すぐに帰れると思ってました。

それからの生活の激しさは思い出しても大変な事でした。

まず、食糧が手に入らなくなり、両親と幼子を背にどうやって生きていくか？

戦中戦後の日本中の人々の生活苦は、言葉にもならない壮絶なものでした。

「戦争は絶対にしてはいけません！」

夫の出征後、一日たりとも、食べるため食べさせるために遊んではいられぬ私は、口利きで港湾荷役の藤木企業に計算課員として入社いたしました。二、三ケ月後、算盤の腕を見込まれて桜木町の弁天通りに事務所があった下請け会社の三浦組に引き抜かれ、経理事務員に転職致しました。社長に気に入られて、当時としては良い給料で、磯子に親子で住める家まで用意して貰い、それは勿体ないくらいでした。

毎日の空襲の中を桜木町まで通勤し、今日此の家に戻って来れるかと思う位に激しく空襲警報が鳴る毎日でした。

会社の勤めは楽しく一生懸命働きました。

社長は関西のかたで、金儲けが上手で、景気が良いに任せて、金で何でも解決出来ると思ってたのでしょう・・・

其の内、私を自分の思い通りのものにしたくなったのでしょう。

仲立人を立てて話に来ましたが、若かった私には夫の居る身だし、とんでもない事だと強く撥ね

付けました。
潔癖な若い心は強かったと思います。プライドを傷つけられた社長は、翌日、「家を出ていけ」と言いました。
私一人ならともかく、年老いた両親と幼い子をどうしよう。
忘れもしない、二月の雪の降る日でした。学友の叔父さんで材木会社の課長をしている人に相談に行きましたら、何と『捨てる神あれば、拾う神あり』で、「丁度、配給所の事務所の二階が空いているので引っ越してこないか」と言われ、何と有難かった事か！
翌日、その頃は馬車で引っ越しをしました。少しばかりの家具を載み、父、母、子供と雪の積もった道を三吉橋の近くの新居へと歩いて行きました・・・今も眼に残っている光景です。
お陰様で、私はそこの事務員になれまして、二階に家族が住み、一階の事務所で私が働ける様になりました。
神奈川県木（株）の闊葉樹の配給所でした。その時の社長は小此木歌次さんでした。（ちなみに戦後大臣を務められた小此木彦三郎さんのお父様です。）
本社は伊勢佐木町の野澤屋の二階にあり、仕事で度々行きました。配給所には県内の材木店のご主人達が勤めに来て、いつも十名くらいは仕事をしておりました。
私の母は、皆さんのお茶くみなどして手伝い、父は薪割りや、お風呂の世話をし、子供は材木置き場で遊んでおりました。月給は前の半分になりましたが、昼休みにはモンペなどのミシン掛け、夜は編み物などして良く働きました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

社員になり心は落ち着けたのですが、毎日の空襲は激しくなるばかりで、あちら、こちらと火の手の上がる毎日でした。

其の中を毎朝荷運びの馬車が来るのですが、重い荷物を牽いている馬は、かつて根岸の競馬場で馬場を走っていたサラブレッドの競走馬だったのです。

澄んだ眼が、悲しそうに私を見ます。お茶殻が好物と聞き、社員の飲んだお茶殻を干して置き、翌日の朝、やって来た馬に食べさせると、とても嬉しそうに眼を潤ませて食べてくれました。あの細い美しい足で荷馬車を牽くなんて・・・

「可哀そうだから叩かないでね」と馬主に頼みました。

あんな美しい馬までも、重い荷車を牽かされるなんて・・・戦争は残酷です！　あの優しい眼は忘れません！

それから数日後に横浜大空襲でした。其の日は、朝からよく晴れた五月晴れの静かな午前でした。

息子が四十度の熱を出していたので、会社を休み看病しておりました時、空襲警報が鳴り、いつもと違うけたたましい鳴り方でした。アッ！と言う間に五百機ものＢ２９が横浜の空へ襲って来たのです。夥しい轟音をあげて・・・

二十人も入れる頑丈な会社の防空壕に皆で入り、息子を奥の方に布団を敷いて寝かせていたのですが、そのうち外でバリバリと凄い音がするので、男の人が上の重い蓋を開けて外を見ると、黒い煙が空一面に、外は真っ暗！　驚いている間もなく空から焼夷弾の雨が降って来た！　縄で

©2011_財団法人神奈川県遺族会

作ったハタキなど何の役にも立たず。たちまちあたり一面火の海になる。もう口などきく間もなく、逃げることしかできず。火の海の中を、息子を背負い、母の手を引き、防空壕から抜け出した。

父は「此処に残る」と言い動かないので、母と皆の行く方へ逃げた。商店街を避難中に二度目の焼夷弾の攻撃があり、同時に機銃掃射による攻撃で、後ろの人が四、五人倒れ、近くは血の海になった。

これ等の記憶は、忘れようとし、思い出したくなく、語りたくなく、そっと胸に仕舞っておりましたが、今、書き始めると、あの時の光景の凄まじさ、恐ろしさ、悲惨さが次から次へとドッと噴き出してきます。

「祖先の為、未来の為に、美しい此の日本を残してください。守ってください。」

「戦争は絶対にしてはいけません！」

「平和な世界を守れ！」

私達、苦難を乗り越えて来た者の願いは一つです。

戦死していった多くの御魂の安らかなる事を祈り、守って行きたいです。

©2011_財団法人神奈川県遺族会